

住宅リフォーム助成が 鈴鹿市でも2012年度に始まります

2月22日から市議会3月定例会が始まり、末松市長がはじめて編成した2012年度予算が上程されました。その予算案の中で、2年前から共産党市議団が提案してきた「住宅リフォーム助成制度」が、新規事業として計上されています。

工事費の10%、1件5万円上限、総額3000万円

「緊急経済対策住宅リフォーム促進事業費」として予算化された事業の概要を紹介します。

市民が自らが居住する住宅のリフォームを市内施工業者に発注した場合に、その経費の一部を補助することにより、地元建設業界の活性化と消費の拡大等の経済効果を期待して実施する。

10万円以上のリフォーム工事に係る費用の10%を補助。5万円上限。平成24年度単年度限りの事業。

末松市長がリフォーム助成を決めたのは大いに結構です。しかし内容的には、全国や近隣の自治体の事例でも「10%、上限10万～20万円」が相場のところを、鈴鹿市は5万円と最低です。また、予算額を超えた場合は「抽選」にするとして、助成金をもらえない市民が出ることも予想されます。これらの点について、議会の審議の中でただしていきたいと思います。

先進地の事例では、リフォーム助成によって予算の15倍もの経済効果があると言われます。中小零細の職人さんたちに仕事が出ることによって、お金が市内を回転する波及効果があるからです。いま自宅のリフォームを予定または考えている方は、ぜひこの制度を活用してください。

住民税均等割 2 年後に1000円引上げ

「復興増税」というが、東北には1円も行かない

3月議会に市税条例の改定議案が提案されましたが、その中に2014年度から10年間、市民税の均等割500円（県民税とあわせて1000円）増税が入っています。これは東日本大震災の復興のために必要な費用のうち10.5兆円を増税でまかなう「復興増税」のひとつということです。所得税は2013年から25年間、2.1%上乘せ増税になります。

この均等割1000円が被災地にどのように回るのか尋ねると、「行きません」との答えです。では何に使うのか？市の防災対策に使うことになるのだそうです。何だか、ペテンにかかったような増税です。

そもそも「均等割」とは、年所得28万円以上の市民にかけられる税で、再来年から年額4000円が5000円に上がります。所得割もかからない低収入の市民から取って、しかも「復興」に使わないのでは、ただの庶民増税です。一方では、法人税は5%引き下げてから3年間だけ1割増税という、手の込んだ実質減税になっています。要するに、こんな大災害の復興にも、金持ちが余分な金を出さずに庶民に押し付ける、という仕組みなのです。

ムクドリが竹やぶに「集団ねぐら」



我が家から50メートルほどにある竹やぶに、ムクドリが集団で棲みついています。500羽ほどの群れで、毎日夕方になると、この写真のように電線にズラリと並んで集合します。（遠くの電線にもびっしりと止まっています。）それはそれは賑やかで、6時前に全員

がそろると、いっせいに飛び立ち、竹やぶに移動します。空がムクドリで覆われたようになって、なかなか壮観な光景です。

市内の他の地域でも、また全国的にも都会の真ん中でも、このムクドリの「集団ねぐら」は問題になっているようです。とくに悪さをすることもなし、虫を食べてくれるので助かるという面もありますが、その数の多さには恐ろしさを感じるほどです。春の繁殖期までのガマンです。

中学校給食センター、14年完成へ

中学校での給食を始めるための取り組みが、2012年度から本格化します。新年度予算では、稲生4丁目のセンター建設用地の購入と建物の基本・実施設計、各中学校での搬入口・配膳室のための改修設計などに2億7千万円余を計上、総事業費は24億4千万円を見込んでいます。

センターの工事完成は2014年、末松市長は給食開始を「遅くとも平成27年（2015年）4月に実施」と言っていますが、共産党市議団は「入学や先生の異動などが重なる4月は避けるべき」、また現1年生の卒業に間に合うように、できるだけ前倒しで2014年中に開始するように求めています。

伊勢市全域を走る「おかげバス」

2月17日、市議団で伊勢市に出かけて、市で走らせているコミュニティバス「おかげバス」を視察しました。市役所で話を聞く前に、実際に走っているバスに乗ってみようと、1時間ほどかけて1路線の始発から終点まで乗車しました。「辻久留・藤里ルート」という路線で、近鉄宇治山田駅から山間部の団地まで回っています。

バスは「ぎゅーとら」などショッピングセンターの駐車場の中や、団地の狭い路地もぐるぐる回って、高齢者に少しでも便利のように工夫しています。バス停も小まめに設置されていて、1分きざみで止まります。

今年から予約式の「デマンドバス」も運行始める

市役所の交通政策課で話をうかがいました。全体の運行費用は1億円ほどで、9路線を運行しているとのことでした。その内あまり乗客の多くない3コースについては、今年から「デマンドバス」に変更しています。コースと時間、乗り降りするバス停、人数などを1時間前に予約すれば、その便でタクシー車両が行く方式で、予約がなければ走らないというものです。料金はバスと同じ200円、高齢者と子どもは100円です。

鈴鹿市のCバスと比べると、本数は少ないものの、ほぼ市内全域を走っている（合併した地域も）という点では優れています。また、ルートやバス停の配置なども住民の声を聞きながら、つねに改善の努力をされていて、「走りながら考える」姿勢は、学ぶべきところがありました。

ずいそう



わが伊船新田の400年

私の住む伊船新田は、江戸時代の初期、竜が池から引かれた用水（新田溝）によって開かれた30町歩の田の口の人々が移り住んだのが始まりとされる。竜が池は、伊船の東側の深い谷を堰き止めて作った溜池で、大変な難工事のために「お竜」という娘を人柱として完成させたという伝説がある。

竜が池の築造工事を指揮した伊船村庄屋・真弓長左衛門の徳をたたえて、新田溝のほとりに建てられた祠が、現在の真弓神社であり、われわれ新田の住民が氏子として代々守ってきている。

その神社の入り口に、立派な石灯籠が一对建てられているが、そこに彫られている文字を見ると、「三百年祭記念 大正五年十月」となっている。大正5年は西暦で1916年だから、もうすぐ400年目の2016年になるではないかと、最近気がついた。他の人たちに話すと、「そんな字があったかな」「それなら400年祭でもせんといかんな」となったが、「ところで、400年というのは何から数えるのや？」

祖先が苦勞して切り拓き作ってきた村と田畑

そこで、鈴鹿市史などの文献を調べてみたが、大正5年・1916年から300年前の1616年が、何かあった年なのかがハッキリしない。というのは、竜が池の完成とされる年は寛文5年・1665年で、40年ほどの差がある。真弓長左衛門の死亡年は寛文8年・1668年で、長左衛門を祀った神社ができてから300年ということでもない。1616年には長左衛門はまだ19才だ。

何人かの郷土史に詳しい先生にも聞いてみたが、「だいたい300年くらいやと、当時の方が考えたのですかなあ」とか、「竜が池のできる前にも、新田のあたりには人が住んでいたんでしょう」とか、スカッとした答えはいただけなかった。しかし、「灯籠に彫ってある、大正5年に300年祭をしたことは事実なのだから、それから100年後を400年祭とすれば良いのでは」という意見が、いちばん納まりが良さそうである。

いまから4年後が「400年祭」とすれば、ぼつぼつ考えていく必要がある。わが伊船新田の過去・現在・未来について、そして400年の間、ここで暮らし働き、村を発展させてきたわれらの祖先のことを。